

# 中信平地区周辺の歴史概要図

凡例

主要な開発時期による区分

(左岸側)	(右岸側)	古	注： この色分けは左岸、右岸それぞれについて地区毎の主要な開発時期の順番を示したものです。同じ色でも左岸側と右岸側の開発時期は同じではありません。
緑	緑	↑	
黄	黄	↓	
新	新	↓	

河川

- 主な水路（堰）
- 主な古墳、神社等
- 郷、牧、荘の位置（推定）
- (赤字) 荘園村落、新田村

注：河川・水路の位置は現在のものである

明治の初め頃までは、わずかな沢水による農業が行われていたが、絶対的な水不足により粟や稗などしか作れなかった。その後、苦労の上開削された波田堰及び黒川堰によって水不足が解消され、開田が進んだ。

扇状地の上部・小河川沿いに縄文時代の遺跡が多数確認されており、古くから人々が生活していた。水にあまり恵まれず、本格的な開発は、昭和40～50年代の国営中信平土地改良事業以降であり、今では全国にも有名なりんご団地等となっている。

鎖川などの河川沿いに縄文時代の遺跡や平安時代の開発（洗馬牧、洗馬荘）がみられるが、流域の開発が進むにつれて水不足が深刻となった。昭和40～50年代の国営中信平土地改良事業後は、高品質を誇る葉菜の一大産地となっている。

烏川沿いまたは扇状地末端の湧水帯にあり、縄文時代や弥生時代の遺跡が多数見つかっている。安曇族が移り住んだ地であり、平安時代以降、八原郷・矢原御厨として開発が進んだ。

水に恵まれず、江戸時代まで開発があまり進んでいなかった。横堰（矢原堰、拾ヶ堰など）が開削されて以降、新田開発が進んだ地域である。

8世紀～9世紀後半にかけて、奈良井川の河岸段丘上の広い範囲に開発の拠点となる集落がつくられた。

7世紀後半以降、和田堰の開削とともに開発が進み大井郷があった。その後島立・新村地区で条里地割が施行されるなど、数々の水路堰の開削とともに開発が進んだ地域である。

平安時代、高家郷として、自然堤防や段丘上に村落が立地した。その後、立田堰をはじめとする堰の開削とともに新田開発が進んだ。平安末期から室町末期までは、住吉荘として発展した。

